

2016年4月21日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 苦を解決する道＝四諦

### 1. 概要

#### (1) 資料

- ① 増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫(p.283)／実践の方法(道)に関する経典群／諦  
相応／5 如来所説(この経文は4つに分けて考えることができます。今回は、第二の部分を学びたいと思います)
- ② 庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社(p.72)

#### (2) 主題

四つの聖諦(しょうたい)の教えを、実践的に研究したいと思います。

### 2. 四つの聖諦

#### (1) 四つの聖諦

中道に引き続いて、釈迦牟尼世尊は、四つの聖諦の説法を始められます。

「四つの聖諦」とは、「苦の聖諦」「苦の生起の聖諦」「苦の滅尽の聖諦」「苦の滅尽にいたる道の聖諦」です。

#### (2) 「聖」について

「聖(しょう)」がついた言葉には、ものごとの変化に惑わされない境地という意味があります。聖者(しょうじゃ)は、ものごとの変化に惑わされない境地に達した仏陀や修行者のことです。聖道(しょうどう)は、ものごとの変化に惑わされない境地にいたった仏陀や修行者の行いです。また、その境地に達するための修行の道も、聖道と言います。

四つの聖諦は、ものごとの変化に惑わされない境地にいたるための修行の道を明かす教えです。

#### (3) 「諦」について

「諦」とは、「真実にして明らかなこと」であり、「真実を明らかにする」ことです。

「四つの聖諦」では、「苦」「苦の生起」「苦の滅尽」「苦の滅尽にいたる道」の真実を明らかにします。

#### (4) 四諦

「四つの聖諦」はまた「四諦(したい)」と表現され、「苦諦(くたい)」「集諦(しつたい)」「滅諦(めつたい)」「道諦(どうたい)」の四つの諦(さと)りとされます。

### 3. 苦の聖諦

#### (1) 経文

釈迦牟尼世尊は、中道の説法に引き続き、四つの聖諦の説法に入ります。

「『さて、ところで、比丘たちよ、苦の聖諦とはこれである。いわく、生は苦である。老は苦である。病は苦である。死は苦である。歎き・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みは苦である。怨憎するものに遇うは苦である。愛するものと別離するは苦である。求めて得ざるは苦である。総じていえば、この人間の存在を構成するものはすべて苦である』」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 284）

#### (2) さまざまな苦

苦の聖諦では、さまざまなきが列挙されています。

生・老・病・死	四苦	
嘆き・悲しみ・苦しみ・憂い・悩み	愁・悲・苦・憂・悩(しゅう・ひ・く・ゆう・のう)	
怨憎するものに遭う苦	怨憎会苦(おんぞうえく)	四苦とこの四つを合わせて八苦と言います。
愛するものと別離する苦	愛別離苦(あいべつりく)	
求めても得られない苦	求不得苦(ぐふとっく)	
人間の存在を構成するものはすべて苦	五陰盛苦(ごおんじょうく)	

#### (3) 苦諦

自分は、このことがらを、このように苦しんでいると明らかにするのが苦諦です。ここに苦しみのパターンが列挙されているのは、その手掛かりとするためです。

#### (4) 仏の教えを聞かない人

庭野日敬師は、「苦諦とは『仏の教えを聞かない人々にとっては、この世のすべてが苦しみである』ということです」と述べています（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p. 72）。

経文には、しばしば、「まだわたし（釈迦牟尼世尊）の教えを聞いたことのない凡夫」とあります。庭野日敬師の言う「仏の教えを聞かない人々」です。

釈迦牟尼世尊の言う「人間の存在を構成するものはすべて苦」と、庭野日敬師のいう「この世のすべてが苦しみである」は、同じ内容です。

仏の教えを聞かない人は、なにかにつけて苦悩します。このため、この世のすべてが苦しみになってしまうのです。

#### (5) 苦の現代的表現

庭野日敬師は、現代に生きる人々を念頭に、苦を次のように表現しています。

「人生は、第一に精神的な苦しみ、第二に肉体的苦しみ、第三に経済的な苦しみ、その他いろいろな苦しみに満ちています」（同書、p.72）

釈迦牟尼世尊が列挙した苦悩が、これらの苦しみの内容になっています。

#### (6) 苦を直視する

庭野日敬師は「その人生苦から中途半端な逃げかくれかたをしないでその実態を直視し、見極めること、それが『苦諦』です」（前掲書、p.72）と言っています。

苦悩から中途半端な逃げかくれ方をすると、たとえば次のようなことです

- ・自分が苦悩するのはあいつのせいだ、社会のせいだ、先祖のせいだなどと怨嗟の声をあげる。
- ・お酒や遊びにうつつを抜かして苦悩を忘れようとする。
- ・苦悩に打ち負けて、どうせ自分はダメだなどと投げやりになる。
- ・苦悩から目を逸らして、取り組もうとしない。

「苦の聖諦（苦諦）」では、こういう中途半端な態度を改めて、苦悩に正面から向き合うことが、苦悩を解決する第一歩だと教えているのです。

### 4. 苦の生起の聖諦

#### (1) 経文

「『さて、ところで、比丘たちよ、苦の生起の聖諦はこうである。いわく、迷いの生涯を引き起し、喜びと貪りを伴い、あれへこれへと絡まりつく渴愛がそれである。すなわち、欲の渴愛・有の渴愛・無有の渴愛がそれである』」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.284）

#### (2) 苦の生起の聖諦

自分の苦悩は、自分の渴愛によって引き起こされたこと、明らかに悟ることが「苦の生起の聖諦」です。

#### (3) 渴愛の意味

増谷文雄博士の注解より。

「渴愛」とは、喉の渴きを意味し、それによって欲望の激情をいうことばである。

「欲の渴愛」とは、性的快樂にたいする渴愛である。

「有の渴愛」とは、生存にたいする渴愛である。

「無有の渴愛」とは、権勢、繁栄、富などにたいする渴愛である。

（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.119）

#### (4) 渴愛の作用

渴愛には次のような作用があります。

- ・迷いの生涯を引き起す
- ・喜びと貪りを伴う
- ・あれへこれへと絡まりつく

#### (5) 自分欲

- ① 「渴愛」という言葉は難しく響きますので、ビジネス縁起観では、これを「自分欲」と表現しています。「自分本位の欲望」というほどの意味です。
- ② 「自分欲」を持ちますと、「自分に利益をもたらすもの」とか「自分に都合のよいもの」とか、「自分の身体的欲望・精神的欲望・社会的欲望などを満たすもの」等を求めてやみません。
- ③ 「自分欲」には、渴愛の作用がそのまま現れます。
- ④ 「自分欲」を持ちますと、「自分欲」を中心にものごとを考えたり、行なったりします。このため「自分さえよければ他はどうでもいい」、「今がよければよい、後のことなど考えない」、「倫理・道徳など意に介さない」というようなことになりかねません。

#### (6) 苦の原因を悟る

庭野日敬師は、集諦について、次のように解説しています。

「『集諦』というのは、そういう人生苦はどうして起こったものであるかという原因を反省し、探求し、それをはっきりと悟ることです」（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p.72）

苦の原因は「十二因縁」や、妙法蓮華経に説かれる「諸法実相・十如是」に、きわめてはっきりと示されていると、庭野日敬師は言っています。（前掲書、p.72）

十二因縁や十如是によって示される人生苦の原因は、「渴愛」であり「自分欲」です。

### 5. 苦の滅尽の聖諦

#### (1) 経文

「『さて、ところで、比丘たちよ、苦の滅尽の聖諦はこうである。いわく、その渴愛をあますところなく離れ滅して、捨てさり、振り切り、解脱して、執着なきにいたるのである』」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.284）

#### (2) 苦の滅尽の聖諦

苦悩の原因である渴愛（自分欲）を、「あますところなく離れ滅して、捨てさり、振り切る」ことができれば、「解脱して、執着なきにいたる」ことができます。

### (3) 苦の滅尽とは

① 苦の滅尽とは「解脱して、執着なきにいたる」ことなのです。

すなわち、二度と苦が生じない状態に入ることが、苦の根本的な解決なのです。

② 目の前の苦悩の状態が無くなることを、苦悩の解決と思いがちですが、このような解決では、また苦悩が生じます。苦悩の原因が消滅していないからです。

釈迦牟尼世尊は、苦悩が二度と起きないようになることを、苦の根本的な解決と言っているのです。

### (4) この世に寂光土を現出する

庭野日敬師は、「『滅諦』というのは、そういう人生苦を消滅した安穩の境地です」（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p.72）と言います。

「安穩の境地」とは、「精神的な苦しみも、肉体的な苦しみも、経済的な苦しみも、その他一切の苦しみを断ち切り、この世に寂光土を現出した姿」（同、p.72）です。

この世に寂光土を現出すれば、苦は二度と起きません。

「この世の寂光土」が、どこに現出するのかといえば、人生苦を消滅した自分の中に現出するのです。

### (5) 三大真理を悟る

この世に寂光土を現出するためには、どうすればいいのでしょうか。庭野日敬師は次のように述べます。

「それ（この世に寂光土を現出すること）は、釈尊が悟られた『諸行無常』『諸法無我』『涅槃寂静』という三大真理を悟ることができてこそ、はじめて達せられる境地なのです」（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p.72）

「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂静」という三大真理を悟ることができると、苦の原因である「渴愛」すなわち「自分欲」は滅します。

「渴愛＝自分欲」が滅した自分の中に、この世の寂光土が現出するのです。

## 6. 苦の滅尽にいたる道の聖諦

### (1) 経文

「『ところで、さて、比丘たちよ、苦の滅尽にいたる道の聖諦はこうである。いわく、聖なる八支の道である。すなわち、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定である』」（増谷文雄編訳『阿含経典』ちくま学芸文庫、p.284）

## (2) 苦の滅尽にいたる道の聖諦

「渴愛＝自分欲」を滅し、二度と苦を生じない境地にいたる道は、「聖なる八支の道」であると、釈迦牟尼世尊は言います。

## (3) 三大真理を悟

① 庭野日敬師は、「釈尊が悟られた『諸行無常』『諸法無我』『涅槃寂靜』という三大真理を悟ることができてこそ、この世に寂光土を現出することができる」と述べました。

そのための修行の道が「道諦」です。

② 「ところが、この三大真理を悟るということは、凡夫にとってはおいそれとできることではありません。それには、日々の修行と努力が必要です」（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p.72）と、庭野日敬師は言います。

この場合の凡夫は仏の教えを聞いたことのない人ではなく、教えを聞いて修行の気持ちを起しているけれども、まだ煩惱を持ち続けている在家修行者のことであろうと思います。このような人びと（私どもも含めて）にとって、三大真理は、おいそれと悟れるものではないのです。

③ ついで、「日々の修行と努力」の内容が、具体的に示されます。

「すなわち、妙（みょう、心）、体（たい、姿）、振（ふり、行動）の三面に、菩薩道を実践することです。もっとつつこんでいうならば、あとで説きます『八正道』と『六波羅蜜』に精進することです。これが、苦を滅する道の教え『道諦』です」（同書、p.72～73）

④ やはり、修行の道は「八正道」です。「六波羅蜜」は、在家の社会的な活動を念頭に「八正道」を組みなおした修行道です。

「八正道・六波羅蜜」を、日々の生活の中で実践し続ければ、三大真理に対する悟りが次第に深まり、「渴愛＝自分欲」が次第に消滅していきますから、次第に苦悩することがなくなります。

## (4) 自分との闘い

釈迦牟尼世尊・庭野日敬師が示した修行の道は、自分の持つ「渴愛＝自分欲」との闘いの道です。その意味で、ダンマパダ（法句経）の次の経文を、心に留めて置くといいのではないのでしょうか。

「戦場において百万人に勝つよりも、唯だ一つの自己に克つ者こそ、じつに最上の勝利者である」

（中村 元訳『ブッダの真理のことば 感興のことば』岩波文庫、p.24）